

泉鏡花「黒百合」再考

お茶の水女子大学 羅 小如

本発表は、泉鏡花の小説「黒百合」（明治三十二年）を対象に考察し、「この作品は果たして何を語るものなのか」という問いに対して、新たな可能性を提示することを目標にしている。明治三十年代とは、日露戦争と日清戦争を経て、日本が近代国家に生まれ変わっていく激動の時代とされている。明治から大正にかけて活躍した作家泉鏡花にとって、代表作の「高野聖」（明治三十三年）の発表、師である尾崎紅葉の死、自然主義の隆盛と衰退など文壇の激しい変化と共に、躍進、沈み、そして再起を経験しながら、作家としての確固たる地位を築き上げた時期でもある。明治三十二年夏に「読売新聞」で連載された長編作品「黒百合」は、同時代評に構成上の欠陥などを指摘され、読者の不評を買ったものである。一方、先行研究では、冒険小説をはじめとした文壇の潮流に対して、積極的に応答する意欲的作品と目されている。本作に対する批判や先行研究を見ると、不評を招く原因として、作品の主題や人物の配置などに問題があることが考えられる。この問題を考えるにあたって、副次的と捉えがちな主要人物若山実に着目したい。〈盲目〉の若山に関して、これまでは夢を目撃する機能性に関心が集中しているが、弱い彼の存在によって冒険譚としての「黒百合」に不協和音が生じるのである。本発表はこのことを検証するため、テキストに周到に用意されている若山実の物語を丁寧に読み解く作業から始める。そして、大正十四年頃、五十歳を超えた鏡花は自身の初の全集刊行を迎えた際、各作品に細やかな修正を行ったことを視野に入れて、これまで問題視されてこなかった本作の自筆訂正の問題を俎上に載せる。こうした作業を通して、病弱と身体、または人間の再起の物語など、「黒百合」の読みの可能性を広げ、「本作は何を語るものなのか」を再考する。